

こんにちは。研修医一年目の遠藤春香です。神奈川県の聖マリアンナ医大を卒業し、4月から和医大に勤務させていただいています。

マッチングで和医大を一位に選んだのはちょうど一年前の9月でした。夏までの私はまだ研修先を母校と和医大で迷っていて、正直、母校が優勢でした。和歌山県出身なので、戻らなくてはいけない事情があったものの、母校への愛情は深く、先生方・先輩・後輩、そして、何も言わなくても分かり合えた仲間である同期達……。そういう大事なものを全部置いて、新しい場所でやっていく事を決めるには大きな勇気が必要だったからです。しかし、同時に和医大がずっと気になっていたことも事実でした。5年生の夏休みに見学に来て以来、和医大って実はすごくいい病院なんじゃないのか？という事実を無視できなくなっていたのです。

田舎です。和歌山県のたった一つの大学病院です。他には大きな病院は数多くありません。陸の孤島なんて呼ぶ人もいます。私もその一人でした。でも実際は……。

救急車はもちろん、天候の許す限りほぼ毎日Dr.ヘリが飛び、遠くから重症の患者さんを運んで来ます。「和医大は和歌山県の人々にとって最後の砦なんだよ。」先生方は皆こう言っておられました。「自分が診なきゃ助からない人がいる」と感じながら働くことがモチベーションを上げ、医療の水準を上げることに繋がるともおっしゃっていました。また一方で、患者さんと医師との何気ない会話の一つ一つにユーモアがあり、相手の事情を慮った言葉が必ず入りました。初めて会っただろうに、まるで昔からの知り合いみたいに会話が始まる事もありました。暖かい気持ちになりました。単に関東との文化の違いなのかもしれませんが、私の目には本当に新鮮に映りました。和医大とはそういうところでした。故郷の医大の頼もしさと温かさに触れ、それを誇らしく感じたものでした。

そして一年前のあの日、マッチングのPC画面を見ながら最後に浮かんだのは上野センター長の笑顔でした。あの笑顔と大声はなかなか忘れられるものではありません。あの人がいるから大丈夫だな、そう思いました。

私は今、51人の同期と共に研修生活を送っています。36人が和医大生、他大学出身が15人です。和医大には外から来た者を温かく迎える文化があるらしく、知らない顔の私に初日から皆話しかけてくれ、すぐに友達ができました。皆とても勉強熱心で、とっても楽しい魅力的な人ばかりです。仕事で落ち込むことがあっても、Homeである研修センターに戻って同期と話しているうちにまた頑張ろうと思えます。今では苦楽を共にした仲間です。また、今まで第一外科と消化器内科を回ってきましたが、いずれの科でも心から尊敬できる先生方との出会いがありました。疲れて弱音を吐きたくなるような状況でも常に志を高く持ち、黙々と仕事に取り組まれるその背中からは、医師としての決意を感じました。叱られる事もしょっちゅうでしたが、愛情いっぱい指導していただいた思い出やいただいた言葉は、日光や雨のように温かく降り注ぎ、まだ小さい苗木である自分の栄養になって

いるのを感じます。

ある時期、癌の末期で余命数日という患者さんと肩を並べて、毎日病室から海を眺めていたことがありました。最初にお会いした時よりとても小さくなった患者さんの肩を支えながら見るその海は、あまりにも美しく、大きくて、涙が止まらなくなりました。でもずっと闘ってこられたこの方が、最期を過ごした場所がここでよかったなと思えました。思い切って帰って来て良かったです。

上野センター長から私にこの欄の依頼が来たのは、おそらく私が毎日楽しそうに研修生活を送っているのが分かるからでしょう。私を選んで正解かどうかは分かりませんが、これを御覧になっている皆さんに少しでも和医大の魅力が伝われば幸いです。

9月からは小児科です。がんばります。